

田中康夫さん × 甘糟りり子さん

あの頃、

キャンパスファッショントレンドが
リアルなトレンドだった

漂いつつ、でも流されず……。80年代をリードしたキャンパスファッショントレンドの真実を、
『なんとなく、クリスタル』の田中康夫さん、GOLD世代の甘糟りり子さんが振り返ります。

撮影／筒井義昭（ヘア&メイク／合田和人 デイジー） 取材文／大谷道子
構成／佐々木早苗（GOLD） 撮影協力／ブルガリイルリストランテ

GOLD

May 2014 No.7

女子大生というだけで
何でもOKな時代

甘糟 私が『なんとなく、クリスタル』を読んだのは高校生のとき。「大学生になったらこんなキラキラした毎日が待っているんだ!」と思いましたが、女子大生というだけでちやほやされて、何でも許される時代でした。

田中 だって、あなたは選ばれし存在だったから。

甘糟 私だけではなく、当時の「女子大生」は大いなる特権でしたよ。**ニュートラ**、**ハマトラ**、**サーファア**が三大派閥でしょうか。

田中 いわゆるJJスタイルね。基本形としてニュートラがあつて、その派生でハマトラ。サーファアは少し別の集団だったのかな？

甘糟 私は、サーファア・スタイルも好きでしたよ。日焼けした肌もアクセサリーのうちでしたから、美白なんて発想は1ミリもなく。

田中 あなたのいた玉川学園は多士済々で、幅広かつたんだと思う。**甘糟** いろんな分野の濃い人がいました。神戸よりJJっぽい女の子や、文化服装学院と同じくらいモードな人や。私はデザイナーズ・ブランドも持っていて、遊びに行く場所や友達に合わせてカメレオンのように変身して。一週間ぐらい戻りたいなあ、あの頃に。

何はなくともアルファキュービック

田中 それぞれの大学のカラーも

今よりも明確でしたよね。

甘糟 当時、一番のブランドは「青山学院女子短期大学」。私は家庭教師の先生が東京女子大の学生で、高校受験が終わってデイスコに連れてってもらったんです。その時「声をかけられたら**青糟**って言いなさい」って教わりました。

田中 う〜ん、わかる(苦笑)。

甘糟 『なんとなく、クリスタル』にもありますけれど、共学より女子大や短大のほうが巷では価値が高かった。巷っていうのは苗場のスキー場とか六本木の**デイスコ**のことですが。

田中 僕が学生の頃は、カンタベリーハウスがミラーハーの一番の溜まり場だった。あとはグリーンハウスとかブロスとか。あなたの世代だとマハラジャ？

甘糟 ですね。マハラジャがオープンして、夜の空気が変わりましたね。何もかもがキンキラキン。「キラキラ」じゃなくて。バブルの前触れだったんですね。その前のキサナの跡地にできたナバーナやマジック迎いで遊んでました。

田中 懐かしい。サークル主催のデイスコパーティーにもフィラとか





たなかやすお 作家。1956年生まれ。一橋大学法学部在学中に『なんとなく、クリスタル』で文藝賞を受賞。2000年から長野県知事を2期務めた後、参議院議員、衆議院議員。『昔みたい』『神戸震災日記』、浅田彰氏との『憂国呆談』シリーズなど著書多数。

あまかす・ゆりこ 作家。1964年生まれ。玉川大学文学部卒業。ファッション、食、スポーツ、車など幅広いジャンルでエッセイやコラムを執筆。小説作品に『中年前夜』『長い失恋』『ミ・キュー』『逢えない夜を、数えてみても』『エストロゲン』などがある。

エッセイで出かけてたでしょ。

甘糟 マジアのテニスシャツなんていうのもありました。ニュートラの後は、ジュンコシマダのワンピースがデイスコの定番の服でした。あの頃の女子大生って、実際の年齢より上に見せようとしてましたね。ケバイという形容も、あの種の褒め言葉だったし。

田中 そうしてティエリー・ミュグレイやアラリアも出てきて。

甘糟 なんといっても、外せないのはアルファキユービックです。あの頃の私たちはアルファキユービックでできてました。

田中 うんうん。70年代後半から80年代前半はアルファキユービックがニュートラ学校の教授。

甘糟 アルファキユービックの中にもいろんなブランドがあつて、レノマとかラネロツシとか。

田中 グイード・バスカアーリも。**甘糟** 青山のフィガロで待ち合わせして、隣のアルファキユービックに買い物に行くのが一番好きなコースでした。

田中 東京ではブランドありきでそこから選ぶ感じだったけど、並行輸入ものは阪神間からだよね。

甘糟 ドライブがてらに神戸まで光り物のアクセサリーを買いに行ったりしてましたね。

田中 僕も女の子と一緒に。セレクトショップって、もともと芦屋や夙川から始まったでしょ。

甘糟 東京だと、最初にメジャーになったのはピサでしょうが。それまで109で八枚接ぎのフレア

スカートなんか買っていた私にとっては、そこにあるものはみんな信じられないお値段で。「服やバッグにこんなにお金使っているのだからか」と悩みなながらも、深みにハマっていくという……。

流行のルールの中で マイスタイルをつくる

田中 ニュートラの偉大さは、傍目にはみんなが同じ格好に見えて

実は違っていたという点。ニュートラという文法は守りながらも、その中で「私はこのブランドのこのアイテムが好き」と自分なりに主体的にコーディネートしていた。**甘糟** ルールの中でオリジナルを追求していくのが楽しかった。

田中 まさに「なんとなく」の気分で生きてはいいても、私なりのテイストがあつて選んでるのよと、ひそかに自信を持っていたんじゃないかな。逆に、ニュートラなんて消費社会に流されてるだけと横目で見ていた「知性派」の人たちほど、権威とか肩書とか精神的ブランドに弱かったりするもの。

甘糟 私はそういう人たちにバカにされてることも気づかないくらい、何も考えてなかった(笑)。頭の中にあるのは今日のことだけという感じで。

田中 それは謙遜でしょうけど(笑)。「J」はもともと「女性自身」で実用ページを担当していた編集者が、実際にニュートラを着ている読者が共感できる雑誌がないってところから始まった。その

意味では、純文学的なモードではなく、日常の生活に根ざした、いうなればアンダライアントなんですね。そして年齢と経験を重ねて「GOLD」にたどり着いた人たちは、教科書のように読むわけでもなければ「私のほうが上」と斜に構えてるわけでもなく、精神的に余裕があつて、自分の引き出しをちゃんと持つてるんだね。

甘糟 派手なことを肯定できる人たちでもありますよね。アメリカものの洗礼を受け、ヨーロッパブランドに翻弄され、最近では、地味なほうが「わかっている」ように見えることも知っている。それでも、派手でいいじゃん、と言い切れる度胸と自信がある。

田中 お高くとまるわけでもなく、かといって情報を鵜呑みにするわけでもなく、自分なりに咀嚼して「私」というものを創ってる、極めてしなやかな人たち。他の同性からも「ああ、いいね」と一目置かれるスタイルを生み出して生きていくのは、今の超少子高齢社会において、ひとつの希望だと僕は思ってるんだだけ。

甘糟 なるほど。私の世代って、年代が変わるごとに女性誌が創刊されるんです。嬉しい反面、いつまでたつても降りられないという警告な悩みも生まれます。

田中 確かにね。でも、だからこそ、生きてきた私ではなく永遠に生きていく私としての自分の魅力的な輝きを実感できるんでしょ

うね。

*1 『なんとなく、クリスタル』

*2 ニュートラ
今風にいえば、当時の最「モテ服」だったのかもしれない。しかし、「モテ」という言葉が、女性ファッション誌で使われることはありませんでした。まだ、懐かしさが残っていたんでしょうね。

*3 J
創刊時のタイトルは実は「別冊女性自身」。

*4 蜜屋
六本木や苗場や湘南では、青山女子短期大学と青山学院大学は別ものとされてきました。短期大学の存在感が今では考えられないくらい大きかった時代です。

*5 デイスコ
あの頃、カラオケはまだオザジンの専売特許でした。若者はディスコでダンス&チークタイム&ナンパ。大抵のディスコはフリードリンク&フリーフードでしたが、マハラジャは店内でのみ通用する紙幣を発行。分厚いハニートーストは名物メニューでした。

*6 ミュグレイやアラリア
フランスのクチュリエ。日本ではいわゆるポディコン系の2大巨頭として有名。

*7 アルファキユービック
70年に柴田良三氏が設立したアパレルメーカー。アルファキユービックという響きそのものが、ひとつのジャンルでした。現在は別会社が商標を引き継いでいます。

*8 露山のフィガロ
フィガロ、ストロベリーファーム、キーウエストクラブ、デュリエール、ル・プロツテ……。女子大生は、とにかく「お茶」してました。

*9 ピサ
プリンスホテル・ブランドが輝いていた時代でした。「赤プリ」はデザートにおける頂点のブランド。芝公園の東京プリンスの地下にあったピサもまた然り。

*10 アンダライアント
ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館に象徴される、豊かな生活の中から生み出された実用的美術品や工芸品。